

平成 26 年度第 1 回 海岸工学委員会議事録

開催日時：平成 26 年 6 月 10 日(火) 14:00～16:55

開催場所：主婦会館プラザエフ 9F スズラン (JR 四谷駅麴町口徒歩 1 分)

出席者：以下の 43 名の委員長，副委員長，幹事長，小委員長，主査，副小委員長，委員，委員兼幹事，幹事
佐藤委員長，青木副委員長，佐々木幹事長，岡安，重松，柿沼，渡部の各小委員長，北野主査，川崎，田島の各副小委員長，宇野（荒木代理），池谷，本田（伊藤代理），太田，大山，岡田（議事録），小野，桐，五道，小林，齋藤，猿渡，松田（津田代理），鳥居，中泉，松浦，松本，水谷，宮武，守屋，山本の各委員，小笠原，栗山，後藤，諏訪，武若，坪野（松山代理），陸田，森屋，八木，山城，横木の各委員兼幹事，下園幹事

資料：

- ・平成 26 年度第 1 回海岸工学委員会の議事次第(資料 1)
- ・第 60 回海岸工学講演会（福岡）の参加者等に関する資料(資料 2)
- ・パワーポイントスライド(資料 3)

1. 委員長挨拶（佐藤委員長）

故藤間功司委員のご逝去に際し，慎んでご冥福をお祈りし，出席者全員で黙祷を捧げた。

2. 前回議事録の確認（佐々木幹事長）

WEB に公開済

3. 議事前報告

(ア) 委員会等への派遣（佐々木幹事長）

H25-26 国土強靱化委員会派遣： 佐藤委員長，横木委員兼幹事

H25-H27 地球環境委員会検討テーマ（理事会委託）「気候変動の影響と緩和・適応方策の検討(仮称)」

派遣： 森小委員長，横木委員兼幹事

H25- 原発汚染水 TF 派遣： 佐藤委員長，同汚染水海洋影響 WG： 佐藤委員長（主査），八木委員兼幹事，佐々木幹事長

H26-H27 委員長指名幹事：下園氏@東大（H27 海講東京開催担当）

H26-H28 調査研究部門幹事派遣： 川崎副小委員長

(イ) 第 60 回海岸工学講演会報告（山城委員）：参加者：4,984 人（3 日間）。収支：328,770 円の黒字

(ウ) 台湾海洋工学会との MOU が昨年 11 月に締結された（佐々木幹事長）

(エ) 12 月 25 日 JSCE-PICE フィリピン高潮災害調査団報告会を開催した（田島副小委員長）

(オ) H26 年度重点研究課題助成に応募したが不採択であった（佐々木幹事長）

(カ) H26 年度ジョイントセミナー助成に応募（担当：田島副小委員長）し，採択された（佐々木幹事長）

今年度、高潮防災をテーマに PICE（フィリピン大学他）とのジョイントセミナーをフィリピンにて開催予定（担当：田島副小委員長）

(キ) 「土木学会の 100 年（土木学会の年史）」の 2005-2014 海岸工学委員会の活動記録を執筆（佐々木幹事長）

(ク) H25 年度活動度評価結果について（佐々木幹事長）

- ① 評価は A ランクであった（1,215 千円が配分）。行事の参加者数および出版物の購読者数の合計人数で評価される。（A：2,500 人以上，B：500 人以上-2,500 人未満，C：500 人未満）
- ② H25 年度実績は行事参加者 2,458 人（夏期研修会，前日シンポ，海岸工学講演会）および出版物購読者数 154 人を合わせると 2,612 人だった。A ランクの基準を僅かにクリアーという状況だった。A ランクを確保するためには，参加者数の確保が重要となる。
- ③ 質問・コメント
 - 出版物の購読者の割合は？→海岸工学論文集冊子体の寄与は，事前購入はカウントされないため，大きくない。海岸工学便覧および数値波動の寄与が大きかった。
 - 前日シンポジウム参加者数を増やすことが有効と考えられる。
 - 土木学会主催行事（フィリピン高潮災害合同調査報告会など）はカウントされない。

4. 海岸工学論文集第 61 巻の査読状況について（岡安小委員長）

(ア) 英文論文を和文論文と同様に全文査読付き論文とした。

(イ) 新設したショートセッションについて

- ① 応募は，企画：7 編，一般：1 編だった。すべて採択レベルだった（最高 25 点，最低 19 点）。
- ② 一般応募は，1 編だけだったので，通常のプログラムに入れることとする。しかし，発表時間を，通常論文と同じ 20 分とするか，当初の予定通り半分にするかは今後，執行部で判断することとした。

(ウ) 査読，査読割り当てについて：平均 16.75 編/人（昨年度：18.21 編/人）

(エ) 通常号および CEJ からの発表希望について：通常号：1 編，CEJ：無し

(オ) 査読者の平均点の分布について：平均点は例年どおり（3.70 点）。

(カ) 和文・英文の査読結果比較について

和文・英文の違いによる査読結果に顕著な相違は見られなかった。和文・英文の区別なく採否を決定した。

(キ) 類似論文について：内容を確認しテーマは異なっていると判断した。

(ク) 採択案について：17 点以上。採択数 305 編（英文含む）。採択率は久しぶりに 80%を超えた（81.6%）。

(ケ) 分野別について

波，流れが相対的に多かった。環境生態系が最近減少傾向。分野による採択率の差はあまりなかった（70-80%）。

(コ) 査読結果の判定カテゴリについて

- ① 昨年度は ACD だったが今年度から B を復活させた。
- ② 査読する際の留意点
 1. 修正後に不採択の可能性のあるものは C とすること。

2. Cが多すぎると印刷工程が遅れる懸念ある.

(サ) 辞退について：305編のうち、5編は本論文原稿提出の際に辞退

(シ) B論文について：原則主査の確認のみ。問題があれば速やかに編集小委員会に連絡する。

(ス) 英文論文について：組版しないため、フォーマットのチェックは厳しく。

(セ) JSTAGE 関連について

引用文献のリンクの関係上、引用文献の雑誌名等はルール通りをお願いしたい。正式名称：土木学会論文集 B2 (海岸工学)。省略形は既に登録済との紹介があったが、後日確認したところ、登録されていないことが判明し、編集小委員会で登録対応することとした。

(ソ) 討議集について：最近若干減っている。ぜひ登録をお願いしたい。

(タ) 査読していて気付いた点

① 図表中の文字の大きさ：小さすぎるものが目立つ。規定は 1.5 mm 以上。冊子体は B5 に縮小されることを考慮。

② 英文のタイトル：単語の 1 文字目は大文字

(チ) 質問・コメント

● 図の配置について：1 段に収めるか、2 段ぶち抜きのどちらかとする。

5. 海岸工学論文集編集検討課題について（岡安小委員長、佐々木幹事長）

(ア) 組版、冊子体の存続について：海岸工学論文集将来検討 WG で検討中（後述）

(イ) 通常号の投稿促進策について

① 特集号（海岸工学論文集）の原稿の不採択分の投稿を呼びかけ。

② 通常号掲載分の講演会での発表枠を創設（今年度は 1 編）。

(ウ) 英文論文の募集

① 今年度は、第一著者が外国籍であることを条件としたが、次年度は撤廃し、第一著者が日本人でも投稿可能とする。

② 講演会において、セッションは和英混在で良いか？

議論：

●和文論文と同じセッションにした方が、多くの人に聞いてもらえ、また、多くの先生方からコメントを頂けるメリットがある。

●和文論文の中に英語論文があると、全体が日本語であるため討議があまり活発にならない懸念がある。従来通り英語論文をまとめるメリットもあるのでないか？

●英語論文をまとめると、コミュニティが閉じてしまう懸念がある。また、今後、海岸工学の国際化のメッセージもある。今後は第一著者が外国籍という制限を外す予定であり、日本人でも英語で投稿できる。

●プログラム編成上も、英文論文を和文と同様に扱うことによって自由度が上がる。

●どちらにしても一長一短がある。今回は英文論文を和文論文と同様に扱うこととしたい。

●承認。

(エ) 海岸工学講演会の活性化について

A ランクを維持するのはギリギリの状況である。今年は、口頭発表のみのセッションを新設した。今後も、新たな試みを考えていく必要がある。通常論文の質の維持と講演会の trans-disciplinary 化に努める。

6. 海岸工学論文集 JSTAGE 作業について（岡安小委員長）

(ア) JSTAGE 側としては、将来 BIB の受付をやめ、BIB XML とする意向。しかし、時期については不明確。BIB XML の作成費用は 1 件当たり 8,000 円から 10,000 円と高額なため、安くする方法を土木学会全体で考えている。半自動化等を検討中であるが、まだ明確に言えない状況。

(イ) 講演会前に JSTAGE に載せるには、早めの組版完了が必要。今年は B を復活させたが、締切は A と同じとした。

7. 海岸工学論文集著者負担金について（佐々木幹事長）

例年通り、35,000 円の予定

8. 海岸工学論文集の論文辞退・題目等変更について（佐々木幹事長）

(ア) 辞退論文について

辞退は 5 編であった。幹事長判断で辞退論文の情報は非公開とするが、多くは周辺分野からの投稿論文であった。今後の海岸工学講演会等の周辺分野への広がり期待し、寛容な対応で様子を見ることとしたい。今後辞退数が増えるようなら運営面でも困るため、改めて対応を考えることとしたい。

(イ) 題目の変更について

① 変更願いが 8 編あった。

② 質問・コメント

- 主査に対し、題目変更を認めた論文についての情報提供をするよう依頼があった → 該当する論文の主査には情報提供する。

- 題目変更の理由についての質問 → WEB 登録との齟齬またはアブストラクト時点での査読者の指摘対応であり、著者独自の判断によるものではない。

(ウ) 著者の変更（増）について

1 件、著者の登録忘れのための著者追加の依頼があったが、認めなかった（WEB 登録された著者リストに基づき査読者の割り振りを行っているため）。

9. 今年度の海岸工学講演会企画セッションとセッション割について（佐々木幹事長）

(ア) 企画セッションを記録として残すため、web 上に恒久的なページを作る。目次からアブストラクト pdf へのリンクできるようにする。

(イ) 一般論文を含む全ての論文のアブストラクトを、1 年間ダウンロードできるようにする（パスワード付きアーカイブファイルを作成）

(ウ) 上記作業は、幹事長が広報小委員会の協力の下で対応。

(エ) 今年度はショートセッション含め全 308 編の論文が発表予定である。来年度以降は全日 5 会場となるが、今年度は 5 会場に加え、2 日目に第 6 会場が確保されている。第 6 会場を使わなくても終了時間を少し延ばすことで対応可能であるが、企画セッション開催時のパラレルセッション数を減らすことを基本方針とし、第 6 会場を通常セッションに活用する以下の案が示された。

	9:00-10:20 (4)			
	10:30-12:10 (5)			
	13:10-14:50 (5)		13:10-14:50 (5)	
	15:00-16:20 (4)		15:00-16:40 (5)	
	16:30-17:50 (4)			
	1日目	2日目	3日目	
1	3,5,5,4,4	4,5,5,4,4	4,5,5,5	=59+3=62
2	3,5,5,4,4	4,5,5,4,4	4,5,5,5	=59+3=62
3	3,5,5,4,4	4,5,5,4,4	4,5,5,5	=59+3=62
4	3,5,5,4,4	4,5,5,4,4	4,5,5,5	=59+3=54
5	3,5,5,4,4	4,5,5,4,4	4,5,5,5	=59+3=54
6		4,5,5		=14
				計308編

セッション割の案 (第 1 会場 2 日目第 4, 第 5 セッションが企画セッション)

(オ) セッション割方針案に対する議論

- (水谷委員・海講実行委員) 3 日目は会場を 17 時までとしている。17 時までには、現状復旧して、鍵を返す必要がある。また、閉会式も考慮する必要がある。朝を早めることは可能。朝は 8 時から利用可能。
- (佐々木幹事長) 基本は 9 時開始とするが、開始をやや早める日もありとしたい。
- プログラム編成上はある程度余裕を持たせた方がよいプログラムを作りやすい。
- プログラム編成時に幹事長が水谷委員と相談しながら考慮することとしたい。→ 承認

10. 来年度以降の企画セッションについて (武若委員)

(ア) オーガナイザーの選定、企画セッションの構成、話題提供者の優遇案について、および来年度のテーマ案「海岸工学分野における気候変動への対応 (仮称)」が報告された。

(イ) 議論・質問・コメント

- ① 来年度の企画セッションの案について: 承認された。オーガナイザーは武若委員にお願いする。
- ② 今後のオーガナイザーの任命について: 委員会の中で企画のアイデアを積極的に出して頂き、その中から委員会の指名で良いのでは。
- ③ 他のコミュニティーへの配慮について:
 - 優遇措置等の議論は今後幹事会で行うが、簡単ではないだろう。
 - 今年度は企画セッションはアブストラクトのみであるが、これでは魅力的でないと感じる方もいる。来年度は、アブストラクトのみとフル論文のどちらかを選べるようにしたい。
 - フル論文の形態を許す場合には、通常論文と査読基準の統一化が必要では？

- 通常論文と全く同じ査読基準とするか、またはオーガナイザーが査読者を選定する等考えられる。
- 一般投稿論文から企画に合っているものを集める形ならば問題はない。しかし、査読者の選定の段階で配慮を入れるのは公平性に問題あるのでは？
- 企画セッションの設立意図は、学会のコミュニティーの拡大にあつたはず。査読を一般論文同様に厳しくすると、コミュニティーの広がりが乏しくなる懸念がある。また、一般投稿論文をベースとした企画セッションの構成では、当初の意図が達成されないのでは？
- 専門性と社会での重要性は違う可能性があり、専門性の観点のみで全てを査読・評価すると、企画セッションの意図が損なわれる可能性がある。
- 依頼論文と一般論文からの抽出の混合という形で、フレキシビリティを持たせた形としたい。
- 依頼論文の査読について、アブストラクト審査段階では、企画セッションに対して配慮し、2次査読の段階では、他と同じとすると形も考えられる。
- 今回の企画セッションは、依頼で集めた。ただし、依頼にもかかわらず、査読で落ちる可能性はあること、投稿料は20,000円をお願いすることで実施した。このようにした理由は、企画セッションに公募形式で投稿する人を含めたかったが、公募形式論文まで「査読なし、投稿料無料」は難しかったため。
- (幹事長)
 - ◇ 来年度のテーマは「海岸工学分野における気候変動への対応(仮称)」とし、オーガナイザーは武若委員にお願いしたい。
 - ◇ オーガナイザーは委員会の議論を踏まえ、委員会で指名することとしたい。
 - ◇ 企画セッションの論文募集は、オーガナイザーからの依頼を基本とし、一般からも公募することとしたい。また、査読に際しては、企画セッションへの応募であることがわかる状態とする等の配慮をした上で、通常論文と区別なく実施するといったことが考えられるが、引き続き検討したい。
 - ◇ 依頼論文(特に他分野)の優遇処置の可能性については、幹事会で議論する。
- 承認

11. 海岸工学論文集の将来検討について(北野WG主査)

(ア) 版下原稿作成の是非と、冊子体廃止(2015年度)の是非についての検討結果について報告。

- ① 組版を止めれば、スケジュール的には余裕がもてる。
- ② 冊子体を止めることによる冊子体売上と広告費の収入減と組版を止める支出減はほぼ同じだった。組版を止めるタイミングと、冊子体をやめるタイミングは同じ方が良い。

(イ) (幹事長) WGの報告によると、冊子体を止めて、組版を残すのは厳しい。組版を止めるタイミングと、冊子体を止めるタイミングは同じにするしかないようだ。幹事会での議論では、来年度には冊子体をやめる方向性だったが、冊子体を止めるのみでは、あまりメリットがないことが判った。再度議論が必要。

(ウ) (幹事長) そもそもこの議論は、著者負担金の減額検討から始まった。土木学会では、行事ごとに収支をとる必要がある。冊子体を止めてもあまり経費はあまり減らず、組版廃止と併せて、5,000円減額できるかどうか程度。支出で学会管理費30% (400万円強) (要確認) が大きい。WGに詳細計算をしてもらったことによって前提が変わったので、議論を見直してもよい。

(エ) (幹事長) 組版を止める場合、9月の幹事会でテンプレートを含む版下原稿作成方法の原案を提示する必要がある。

(オ) 議論

- 2次査読において細かいフォーマットの指摘をしている。現状の著者作成の査読用論文の体裁は不十分か？
- 現状では、体裁は不十分だと感じる。組版を止める場合、フォーマットは通常号に近い形になると思う。通常号に関しては、ワード自動組版ツールおよびテフ組版があり、利用できる。
- 英文の体裁は、既に通常号に合わせている。
- 組版を止める場合、フォーマットを通常号と同じものにすれば、移行は容易である。
- 組版ルールの利用については、英文版がないのが問題。また、専用サーバで実行する必要がある、利用が集中した場合に問題があるのではないか。事前に質問したところでは問題ないとの回答をもらっているが、他の論文集と締切日が重なった場合等の状況下で本当に問題がないかは不明。
- 現状において、フォーマットが大きく異なっているものがある。これに関して、フォーマットのチェックのみ外注できるか？という課題があったはずだが、どうなっているか？
- フォーマットに問題のある論文に関しては、業者による整形とその経費を著者が負担することを採択の条件とすればよい。該当する著者に対して、著者負担金にこの整形経費を上乗せする。
- (幹事長) 来年度から組版と冊子体を共に廃止する方向を改めて確認し、通常号と同じフォーマットを前提に、版下原稿の作成方法やスケジュール等について、9月の幹事会までにWGにて検討することとしたい。→ 承認

12. 第61回 (H26年度) 海岸工学講演会 (名古屋) の準備状況について (水谷委員)

(ア) ホールの使用料は高いので、押さえていない。受付用に部屋を一つ押さえている。

(イ) 部屋は前日の18時から押さえている。

(ウ) フロアーが9, 10, 11階に分かれている。同じフロアーに他の利用者の混在の可能性あり。

(エ) 見学会のAコースについて：船の定員は50名であるが、コンテナターミナルの会議室が30名。ここが人数の制約になる可能性あり。

(オ) 質問・コメント

- 前日の夜は何時まで利用可能か？→21時までOK (ただし、鍵を返す時間)
- 前日、会場はすべて使えるか？→使用可能

13. 第61回 (H26年度) 海岸工学講演会前日シンポジウムについて (武若委員)

テーマ「海岸工学分野における気候変動適応の研究」。話題提供予定者の三村先生が場合によっては出席できない可能性あり。

14. 第 62 回 (H27 年度) 海岸工学講演会 (東京) の準備状況について (下園幹事)

(ア) 日時: 2015 年 11 月 11 日 (水) ~13 日 (金), 会場: タイム 24 ビル (臨海副都心青海 (台場))

(イ) 前日シンポ 11 月 10 日 (火) 日本科学未来館 (隣のビル) (予定)

(ウ) 見学会候補

① 候補 1: 東京港見学・クルーズ (新東京丸, 定員 60 名) 東京都港湾局に依頼を検討

② 候補 2: 港湾空港技術研究所 施設見学 港空研に依頼を検討

15. Coastal Engineering Journal について (渡部小委員長)

(ア) WSPC から現状 15 編/年を 60 編/年に増せないかとの依頼あり. 4 倍は無理でも, 倍増はしたいと考えている. 論文を増やすために, 毎号 5 編 (5 編×4 回=20 編), 特集号 (10 編) を作って, 計 30 編を目指す. 今年の特集号は Prof. Andreas Kortenhaus に企画を依頼. 来年の特集号の企画はフィリピン台風 (田島副小委員長に依頼) 等を検討している.

① 議論

1. 60 編の理由は? →明確には判らない. ICCE の際に WSPC に聞いてみる予定

2. 必ずしも 60 編に増やす必要はないと思う. IF を考慮した場合, 30 編位に抑えた方が有利な場合もある. → 現実的には 30 編位を目標に継続して, 様子を見てみるつもり.

(イ) CEJ Award を広く公開する (過去の受賞者リスト. 目的, 選出方法, 基準を公開) ことについて: 賞の名称の変更 (CEJ Award →Coastal Engineering Journal Award) および Web の記述の変更の提案がなされ, 承認された.

Technical note の論文カテゴリに災害等の速報を対象とすることを明文化するため, prompt report for coastal disasters を追加する提案がなされ, 承認された.

(ウ) CEJ Citation Award の新設について:

名称を含めて具体的内容を継続審議することが承認された.

(エ) 新エディターの就任の報告:

追加の新エディターおよびエディターの交替が紹介され, 承認された.

(オ) CEJ Award, JAMSTEC 中西賞の審査について:

本年度の選考方法の紹介がなされ, 承認された.

承認された選考方法に基づき本年度の下記の受賞論文が発表され, 承認された. 日本人著者のため, 同時に JAMSTEC 中西賞が授与される.

CHARACTERISTICS OF THE 2011 TOHOKU TSUNAMI WAVEFORM ACQUIRED AROUND JAPAN BY NOWPHAS EQUIPMENT

H. KAWAI, M. SATOH, K. KAWAGUCHI, K. SEKI

(Volume 55, Issue 03, September 2013)

(カ) 最近の出版状況について報告:

最近, 中国から投稿が増えている. 倍増に向けて委員会関係者のご協力をお願いしたい.

16. 研究小委員会等の活動について (広報, 沿岸域, 津波, 波動モデル各小委員長)

(ア) 広報小委員会（川崎副小委員長（森小委員長代理））

Web 情報の充実を図っている。討議集の扱いについては、論文集将来検討 WG と協力。

(イ) 波動モデル小委員会の活動について（柿沼小委員長）

平成 26 年度土木学会「重点研究課題（研究助成金）」に応募したが不採択であった。

(ウ) 他小委員会からは特になし

17. 第 50 回（H26 年度）水工学に関する夏期研修会について（山城委員）

(ア) 日時：平成 26 年 8 月 25 日—26 日，場所：九州工業大学

(イ) テーマ「海岸、港湾に関する調査・観測の技術」

(ウ) メール審議結果の報告：学生の参加費を 13,000 円から 10,000 円に値下げした

(エ) 検討事項

- ① 一般の参加費の会員と非会員の差別化について：メール審議では議論が尽くせなかったため、次年度へ検討持ち越しとした。
- ② 一部の講義について、パワーポイントの受講者への配布許可（昨年度の実施内容）について
- ③ 講義集の一部を事前公開（昨年度の実施内容）について
- ④ パネル展示（昨年度の実施内容）について：水工学では今年も実施。海岸工学でも展示するものがあれば展示する。

(オ)（幹事長）検討事項については、引き続き検討をお願いしたい。一般参加費の会員・非会員差別化に関しては、まずはこれまでの参加者の会員・非会員の内訳をチェックしてみる必要がある。非会員が多い場合には、差別化は困難かもしれない。

18. 第 51 回（H27 年度）水工学に関する夏期研修会について（佐々木幹事長）

平成 27 年度は関東地区で担当者を検討したところ、鈴木崇之氏@横浜国立大学にお引き受けいただけることとなった。場所は神奈川県内を予定し、会場およびテーマは未定。平成 27 年度は海岸工学委員会が幹事のため、会場、日程等は海岸工学委員会がリードし、水工学委員会と調整することとなる。

次回の委員会は 11/12（名古屋海講時），幹事会は 9/29 14:00-

以上

記録：岡田